



# 山陽スピリット ニュース No.33

2023(令和5)年11月10日

発行：学校法人 山陽学園 山陽スピリット推進室

## 能登原昭夫名誉教授を偲ぶ

山陽学園大学 非常勤講師  
阿部 紀子

2023年6月に、能登原昭夫名誉教授がご逝去された。教壇に立ち授業や講義をされていた現役の頃の先生をご記憶されている方は多いと思われるため、本稿では、晩年の能登原名誉教授（これ以降は先生と呼称）について、ほんの一部ではあるが回顧録として触れていきたいと思う。

早速だが、私が在学中に、先生とは言葉を少し交わすことがあったかどうか記憶にない。何故なら、先生は国際文化学部コミュニケーション学科の教授であったことから、比較文化学科の私にご指導を直接受ける機会がなかったからだ。そのため、能登原先生の名前や顔は知っていても、関わりは希薄だったと言えるのである。先生と交流を深めるようになったのは、私が教壇に立つようになってからだ。

しかし、何がきっかけなのかは、これも記憶が定かではないのだが、私の直接の恩師である太田健一教授の繋がりだったのではないと思われる。

ある学園祭の時の先生とのやり取りで、印象に残っていることがある。私が1~2歳位の息子達の手をひいて学園祭に参加をした際、先生は私の息子を見ながら「阿部ちゃん、英語脳って知っとるか？小さい時から毎日、英語の歌を聴かせなさい。早ければ早い程良い。そしたら英語脳ができるから」とおっしゃったので、その日から英語の歌を聴かせるようにした。

すると、長男が保育園児の頃に習っていた英会話教室のネイティブから「（長男は）帰国子女なの？」と聞

かれる程に成長していた。また発音についても、重度の知的障害を抱える次男は、綺麗な発音で英単語や挨拶をすることから、彼の通う支援学校の担任は、「下手な発音をする訳にはいかないため、改めて英語の勉強をしています」と面談の

際におっしゃった。小学校に通う娘も、ネイティブから褒めて頂いており、能登原先生のおっしゃっていた「英語脳」は身につくのだと実感したのである。

最後にお会いした今年5月に、能登原先生に子ども達の英語脳について話したところ、「そうじゃろ。英語脳ができるんじゃ」と目を細めて嬉しそうにおっしゃっていた姿は、今も鮮明に思い出すことができる。

また、能登原先生は大変意欲的で、現役を退かれてからも学校に顔を出して、英語教育に携わられていた。それは、山陽学園大学内だけではなく、外部においても様々なご活躍をされていた。その活動の一つである「TIMEの会」について、紹介をしたいと思います。

この「TIMEの会」とは、能登原先生の声掛けで、10年程前に、川崎医科大学の芝田敬元准教授を含めた約5名により立ち上げた会である。

その目的は、能登原先生ご自身が「『TIME誌』を読みたいとのこと」と、「岡山の地方から、国際文化等といった国際性を身につけた人物を育てること」であった。

設立当初は、旭川近くにある岡山外語学院にて、月1回のペースで開催されていたそうで、現在は朝日高校



最後の旅行となった京都にて撮影

内にある六高記念館にて奇数月に開催している。

いつだったのか、これまた記憶が定かではないのだが、「『TIME誌』を読む「TIMEの会」というのを、第三土曜日にしとるんじゃけど、若い者の参加が少ない。阿部ちゃん、一回顔を出してみんか？」と声をかけて頂いた。

私は英語からすっかり離れていたこともあり、「私が参加をしても、ただ座って聞くだけになりますよ。それでもよろしいのでしょうか？」と尋ねると、「構わん。次の第三土曜日に朝日高校の六高記念館へ顔を出すように」とおっしゃったので、渋々出席してみたのである。そこでは、研究職だけでなく他業種のエキスパート的な方々が参加をされており、『TIME誌』の一部の内容がコピーされているプリントを発表者が綺麗な発音で流暢に読み上げた後、その内容について出席者が各々に感想を述べるとともに議論をされていた。正直、(私のような英語に疎い者が来る場所ではない。場違いにも程がある)と恐縮するほどであった。

そのため、次回からの参加について能登原先生へお断りしようかと思っていたのだが、先生からは「次回も顔を出してくるように」と言われたので、参加できる日は出席するようにした。また、能登原先生はお気に入り赤いジャンパーを羽織って朝日高校まで来られていたのは印象深かった。暑い夏の日でも着用されていたのには正直驚いたのだが、それが晩年の能登原先生の姿だったと言える。

先生が体力の衰えを感じるようになられてからは、「TIMEの会」の行き帰りだけでなく同窓会総会の帰りもお送りしていたので、車内でよく語り合った。論文を書くように叱咤激励を受けたり、先生ご自身の身の上話をされたりと、限られた僅かな時間の中で濃厚な内容の話をしていただいていたように思う。

この「TIMEの会」は、今年5月13日に「100回記念」を迎えた。そのため、先生に花束贈呈が行われ涙を流して歓喜される先生のお姿をみることができ、忘れられない日となった。また、先生を「TIMEの会」に送迎し、最後にお会いした日でもあった。

そして「TIMEの会」が、いかに能登原先生にとって大変思い入れがあることが分かるエピソードを取り上げたいと思う。今年6月初めに芝田敬先生に「余命が長くないので、遺言と思って聞いて欲しい。「TIMEの会」を末永く存続できるようにしてもらえないか」らしき旨を、お電話でおっしゃったそうである。

また「TIMEの会」は、先述のように『TIME誌』を読んで議論するというだけでなく、途中から「TIMEを読んで世界を学び世界を知る会」として、会員の各々の専門とする世界の文化に関連する内容も発表されるように変わっていった。

そのため、私は「人権教育」を担当していることから、2020年1月に「セクシュアルマイノリティー」、また2023年7月に「世界の人権問題」と2回発表をしている。今年3月の「TIMEの会」の帰りの車内にて、能登原先生は、7月の私の発表のときにご自身の体験された戦時中や戦後の人権問題について、話をしたいとの希望をおっしゃった。けれども6月に入院されて、結局話してもらえなかったのは残念である。

私にとって、他業種のエキスパート的な方々が参加されている場で発表する機会をいただけたことは、違う角度からのご意見や参考となるお話も聞くことができ、大変有意義であった。その経験は私の成長にもつながり、貴重な体験だったと言える。

以上のことから、「TIMEの会」を高尚な会のように思わず、気後れせずに顔を出してくださる方が一人でも多く現れていただけたならば、先生への供養になると思うのである。

芝田敬先生との最後のやり取りでは、「自分の人生に悔いはない。『拍手をして笑いながら見送ってくれ』と皆に伝えて欲しい」と、先生らしいと思われることをおっしゃっていたようだ。

最後にこの場を借りして、能登原昭夫先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。